

お母さんなわたしと太郎君なぼく：  
日本語教科書における男女の表現について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍵主, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17086">http://hdl.handle.net/2297/17086</a>

# お母さんわたしと太郎君なぼく —日本語教科書における男女の表現について—

経済学部経済学科 3年 鍵主 智美\*

## <概要>

教科書は教育現場で繰り返し使用されることから、学習者の考え方に大きな影響を与える書物であるといえるだろう。かつての教科書の中では男女差別であるとみなされるような表現が使われていたこともあったし、現代でもまだ存在しているようだ。では、男女平等の意識が社会において達成すべき重要な課題として多くの人に認識されている現代において、教科書では男女を記述する際にどのような表現が使用されているのだろうか。

本稿では特に非日本語母語話者が日本語を学習するために作られた日本語教科書に焦点をあて、言語学的視点から男女がどのように表現されているのかを年代ごとに調査した。その結果、男女にかかわる表現は必ずしも平等なものとは言えず、それぞれに特徴が認められることが分かった。また、教科書が発行された年代によって表現に差がみられ、男女を差別するような表現は最近では減少傾向にあることが分かった。

## <キーワード>

教科書、ジェンダー、男女差別

---

\* E-mail: kirarara---7starsrealgoldlala@r.vodafone.ne.jp

## <目次>

### 1. 序論

- 1.1. 研究の目的
- 1.2. 先行研究
- 1.3. 研究対象
- 1.4. 仮説提示
- 1.5. 分析の視点

### 2. 結果

- 2.1. 登場の頻度
- 2.2. 言及されるときと呼ばれ方
- 2.3. 形容のされ方

### 3. 考察

### 4. 結論

### 文献

## 1. 序論

### 1.1. 研究の目的

社会の中での男女平等は達成されるべき重要な目的の1つである。言語のレベルでもその達成のための取り組みが行われている。「看護婦」や「保母」などの男女を制限するような職業名が「看護師」や「保育士」などのように性を特定しない名称に改められたことはその一例である。しかし、そのような動きの中にあっても、「女子アナ」のように未だに男女差別と認識されるような言語的表現が使用されることもあるようだ。

では教育の面では男女平等を実現するためにどのような取り組みが行われているだろうか。教科書の中での男女の記述はどのようになっているだろうか。ここでいう教科書というのは一般に学校教育で使用されているものである。教科書は教育のために作られるものであり、一種の規範ともいえるものである。そうであるならば、教科書の中にはその社会で多くの人が正しい、あるいはこうあるべきであると考えている社会像が反映されているはずである。教科書の内容は授業で繰り返し教えられる。テストによってさらに内容の定着の確認が行われる。そのような過程を経ることによって教科書の記述が教科書の使用者の価値観に影響を与えることもあるだろう。すなわち教科書によってその使用者が社会によって求められる特定の男女それぞれの像を描いてしまうこともあるかもしれない。現在、男女は平等に扱われるべきであるという価値観が人々の間に浸透しつつあり、男女平等を実現しようという取り組みも活発に行われている。人々の意識のこのような変化は教科書にどのように反映されているのだろうか、あるいはされていないのだろうか。もしされているならどのような形で、どの程度反映されているだろうか。

本稿の目的は教科書における男女の表現のされ方を調査し、明らかにすることにある。そしてそれによって明らかとなった表現が男女平等なものであれば、その表現のどこが問題なのか、どうすれば平等なものとなるのかについて検討する。

### 1.2. 先行研究

教科書の中の男女差別について研究した先行研究には伊藤ほか(1991)がある。伊藤らは小学校および中学校の国語・社会科・家庭科・道徳という4教科の教科書の中での男女差別について検討している。彼らはこれらの教科書の中で女性の登場回数が男性に比べて少ないこと、性的役割分業のステレ

オタイプと密接に結びついた表現が使われていることなどを指摘し、教科書の中で男女差別があることを明らかにした。そして表現の改善方法にも言及している。

また、教科書の中の男女差別ではないが、男女差別に関する先行研究として、アメリカで使用されている言語学入門書や統語論入門書の例文に認められる男女差別を研究したものとして Bergvall の研究があげられる(東 1997: 第 5 章)。東(1997)によれば、この研究では例文の中で男女がどのような役割をしているかを調査しており、男性が主語や Agent(行為者)に、女性が目的語や Recipient(受益者)になることが多いことが明らかになっている。

先行研究においては新聞や辞書の中の男女差別を研究するものは多くみられる。例えば、新聞に関する研究では田中・諸橋(1996)が、辞書に関する研究ではことばと女を考える会(1985)が挙げられる。しかし教科書の中の言語表現について、言語的視点から男女差別をテーマにしたものはあまりみられなかった。また、伊藤ほか(1991)のように教科書の中の男女差別を検討している先行研究においても日本語学習者が使用する日本語教科書内での男女の表現に関する調査は見られなかった。日本語を外国語として学習する人向けの日本語教科書では、対象がさまざまな国の人であることから、対象を主に日本人としている小中高で使われる国語や社会などの一般教科の教科書とは男女の表現の点で異なる傾向が現れる可能性がある。そこで本稿では、これまで扱われてこなかった日本語教科書を対象に、そこにおいて男女に関してどのような表現がなされているのかについて分析を試みる。これら进行分析することによって、日本語教科書内での男女の表現についての問題点や優れている点を明らかにする。この研究は男女の表現という点において日本語教科書の改善に貢献しうるはずである。

### 1.3. 研究対象

本稿で調査の対象とする日本語教科書はつぎの 4 種 7 冊である<sup>1)</sup>：

---

<sup>1)</sup>対象とした教科書は以下の 7 冊である。

- －財団法人 海外技術者研修協会(1967)『PRACTICAL JAPANESE CONVERSATION』海外技術者研修調査会。
- －財団法人 海外技術者研修協会(1974)『日本語の基礎 I (本冊漢字かなまじり版)』スリーエーネットワーク。
- －財団法人 海外技術者研修協会(1981)『日本語の基礎 II (本冊漢字かなまじり版)』海外技術者研修調査会。

『Practical Japanese Conversation』(1967)

『日本語の基礎 I / II』(1974/1981)

『新日本語の基礎 I / II』(1990/1993)

『みんなの日本語初級 I / II』(1998/1998)

これらの教科書を選定した理由は以下のとおりである。

言語学の分野では 1970 年代に初めてジェンダーを取り入れた研究が行われている(cf. Lakoff 1975)。男女を差別するような表現がジェンダーの研究によって認識されるようになり、次第に改善されてきている可能性は高い。そこでジェンダー研究が教科書作りに与える影響の変化を見るため、調査の対象とする教科書は、言語学分野でのジェンダー研究が始められるようになる前から現在まで出版されているものが望ましい。日本語教科書の系譜によると、60 年代から現在まで改定されながらも同じ出版社からシリーズとして続けて出版されている日本語教科書は上記の教科書のみであった<sup>2)</sup>。また、『みんなの日本語』は現在最も多くの学習者によって使われている日本語教科書の一つであり、日本語学習者に与える影響力も極めて大きいと考えられる。そこで今回の研究では上記の 4 種 7 冊の教科書を分析の対象とすることにした。

#### 1.4. 仮説提示

すでに述べたように、言語学分野においてジェンダーに関する研究が取り入れられ始めたのは 1970 年代になってからである。80 年代になりジェンダ

---

一財団法人 海外技術者研修協会(1990)『新日本語の基礎 I 本冊漢字かなまじり版』スリーエーネットワーク。

一財団法人 海外技術者研修協会(1993)『新日本語の基礎 II 本冊漢字かなまじり版』スリーエーネットワーク。

一スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級 I 本冊』スリーエーネットワーク。

一スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級 II 本冊』スリーエーネットワーク。

<sup>2)</sup>対象とする教科書の選定には凡人社からご提供いただいた丸山敬介氏の「日本語教科書の系譜」を参考にした。「日本語教科書の系譜」は凡人社の 30 周年記念イベントの際に丸山氏が作成した資料である。資料をご提供いただいた凡人社には深く感謝申し上げます。

一研究は活発になり、90年代に入って一般の人々の間にも浸透してきた(cf. スペンダー 1987)。教科書に社会の状況が反映されると考えるならば、現在の教科書はジェンダー研究の始まる70年代以前のものに比べて男女差別の少ないものになっているはずである。具体的には、まず、男女の登場割合が以前は男性が多く、女性が少なかったのが、現在ではその差が小さくなっていると予想される。また、男女を特徴づける具体的な表現として形容詞に注目すると、以前は男らしさ、女らしさを強調するような表現、例えば、男性は強く、女性は弱いといったようなものがあつたのが、現在ではなくなっているだろうと考えられる。さらに、以前は男性に従属するものとして女性が描かれていたのが、現在では男性も女性もそれぞれ独立した人物として描かれているだろうと予測される。

### 1.5. 分析の視点

本稿では、教科書における男女差別を調査する際の視点として、先に述べた仮説を証明するために、男女それぞれについてつぎ3点を設定する：

- (1) 登場の頻度
- (2) 言及されるときと呼称
- (3) 形容のされ方

(1)の登場の頻度については、とくにつぎの3つの観点から調査する：

- (1-1) 文の話者として
- (1-2) 文中で言及される人物として
- (1-3) 文中で言及される人物の中でとくに文の主語となっている人物として

このように分けて調査するのは、登場頻度の中でも話者や文中で言及される人物のうち主語である人物などは主体性が高いものであるように思われるからである。

(2)の言及されるときと呼称はとくにつぎの2つの場合に分けて分析する：

- (2-1) 固有名詞で呼ばれる場合
- (2-2) 親族名称で呼ばれる場合

このように 2 点に分けるのは固有名詞で呼ばれるのは個人としてみられるという性質、親族名称で呼ばれるのは個人よりも何らかの役割を持った人物としての性質をもつものと考えからである。例えばある人物について「お母さん」と言及した場合、そのように言及された人物は、個人としてのその人よりも「お母さん」としての役割を背負った人物として見られているといえる。

(3)の形容のされ方について調査するのは、当該の教科書では男女が具体的にどのように捉えられているのかを明らかにするためである。それには言語による形容のされ方を調べる方法が有効であるからだ。

## 2. 結果

### 2.1. 登場の頻度

登場の頻度については、すでに述べたように、(1-1)文の話者、(1-2)文中で言及されている人物、(1-3)言及されている人物の中でとくに主語となっている人物、の 3 つの観点から調べた。以下では、それぞれについて結果を述べることにする。

#### 2.1.1. 文の話者

まず、文の話者とはどのような人物を指すのかを具体的に例文を見ながら説明する。

例えば次のような会話が対象とした教科書中にあった<sup>3)</sup>。

A : あなたはラオさんですか。

B : はい、(わたしは)ラオです。

この例文では A のセリフは誰の発言であるかは不明であるため性別も不明である。B は文の内容から「ラオ」が発言していることがわかる。この教科書では最初に主要登場人物一覧があり、それをみれば「ラオ」が男性であることがわかるため、B の発言は男性によるものであると判断される。このようにして文の話者について性別を確認していった。結果はグラフ 1 の通りである。

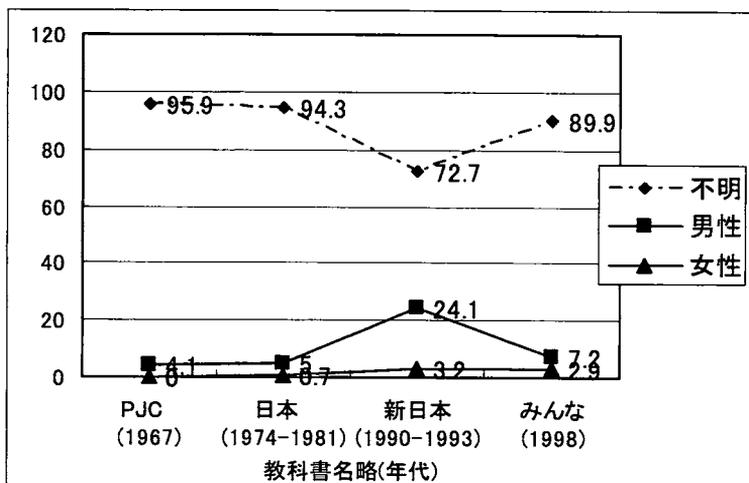
文の話者はどの年代の教科書においても性別不明者が最も多い。しかし年

---

<sup>3)</sup> 『新日本語の基礎 I』 p.4 より

代を経るにしたがって性別不明者は全体的に減少傾向にある。男女の登場頻度を各年代の教科書でそれぞれ見てみると、どの年代の教科書でも男性の方が多く登場していることがわかる。年代を経ても男女の登場頻度の差は小さくなっていない。

グラフ 1：男女別の登場頻度-(1-1)文の話者（単位は%）



### 2.1.2. 文中で言及されている人物

ここでもまず、文中で言及されている人物とはどのような人物をさすのかを具体的に例文を見ながら説明する。

例えば次のような会話が対象とした教科書中にあった<sup>4)</sup>。

C：田中さんは事務所にいますか。

D：いいえ、いません。工場へ行きました。

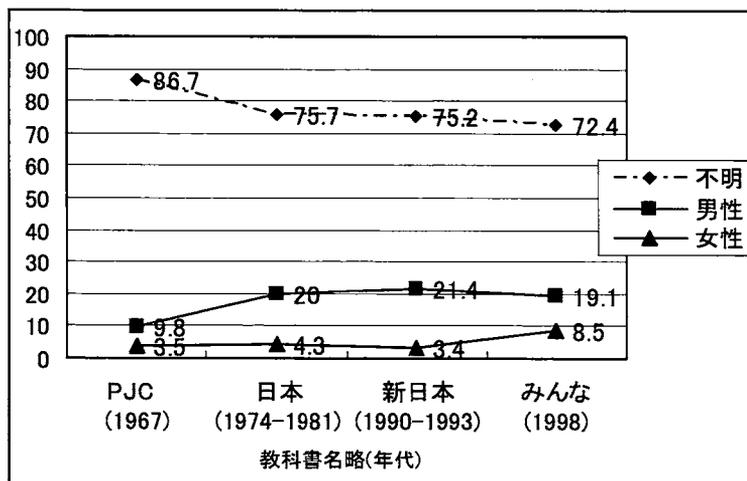
この例文では C・D のセリフで言及されているのは「田中さん」である。すでに述べたが、この教科書では最初に主要登場人物一覧があり、それを見れば田中さんが男性であることがわかるため、C・D の発言で言及されているのは男性であると判断される。このようにして文中で言及されている人物について性別を見ていった。結果はグラフ 2 の通りである。

文中で言及されている人物も文の話者と同様、どの年代の教科書において

<sup>4)</sup> 『新日本語の基礎 I』 p.83 より

も性別不明者が最も多い。また、年代を経るにしたがって性別不明者の割合は低下している。男女別の登場頻度を各年代の教科書でそれぞれ見てみると、どの年代の教科書でも男性の方が多くなっている。男女の登場頻度の差は古い年代順から 6.3 ポイント、15.7 ポイント、18.0 ポイント、10.6 ポイントとなっている。

グラフ 2：男女別の登場頻度-(1-2)文中で言及されている人物（単位は%）



### 2.1.3. 文中で言及されている人物の中でとくに主語となっている人物

まず、文中で言及されている人物の中でとくに主語となっている人物とはどのような人物をさすのかを具体的に例文を見ながら説明する。

例えば対象とした教科書中にあった以下の例文をとりあげてみよう<sup>5)</sup>。

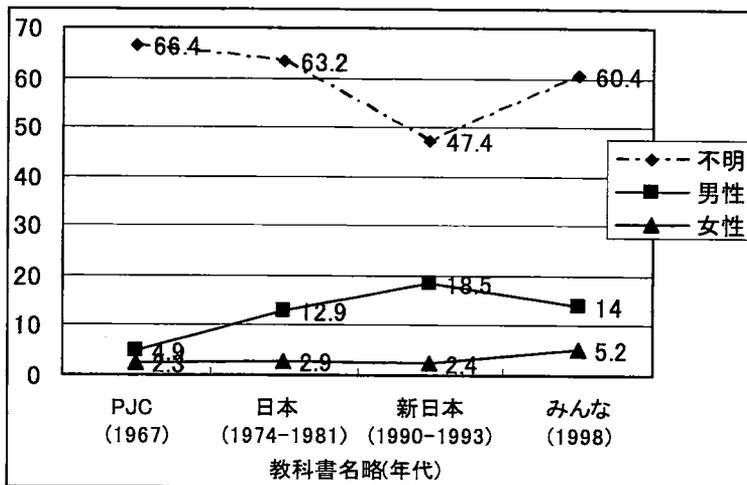
E：わたしは木村さんをしっています。

この例文では「わたし」と「木村さん」の2人が言及されている。主語となっているのは「わたし」である。「わたし」の性別はこの文からは読み取ることができない。よってこの例文では、言及されている人物の中でとくに主語となっている人物の性別は不明ということになる。このようにして文中で言及されている人物の中でとくに主語となっている人物について性別を調べた。結果はグラフ3の通りである。

<sup>5)</sup> 『新日本語の基礎 I』 p.122 より

これも性別不明者がどの年代でももっとも多く、年代を経るに従い減少している。男女を比べた場合は男性の方が登場する割合は高い。男女の登場頻度の差は年代の古い順に 2.6 ポイント、10.0 ポイント、16.1 ポイント、8.8 ポイントとなっている。年代を経ても男女の差が小さくなることはなく、むしろ大きくなっている。

グラフ 3：男女別登場頻度-(1-3)文中で言及されている人物  
とくに主語となっている人物(単位は%)



## 2.2. 言及されるときのかたの呼ばれ方

言及されるときのかたの呼ばれ方については(1)固有名詞、(2)親族名称の 2 つについて調査した。すでに「1.5. 分析の視点」のところで述べたが、この 2 つの点に焦点を当てて調査するのは、固有名詞で呼ばれるのは個人として見られるという性質、親族名称で呼ばれるのは個人よりも何らかの役割を持った人物としての性質をもつものと考えからである。

固有名詞、親族名称で言及されるというのはそれぞれ具体的にどういうことなのかについて以下の例文をしてみる<sup>6)</sup>。

F：わたしは家内に手紙を書きます。

G：わたしは佐藤さんに日本語を習いました。

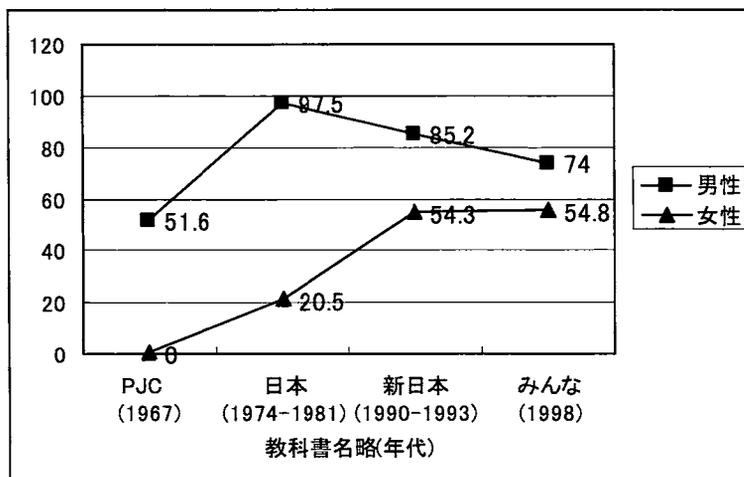
<sup>6)</sup>『新日本語の基礎 I』p.56 より

Fの例文では「わたし」と「家内」について言及されており、Gの例文では「わたし」と「佐藤さん」について言及されている。この2つの例文に言及された人物のうち、固有名詞で言及されている人は「佐藤さん」、親族名称で言及されている人は「家内」である。

### 2.2.1. 固有名詞

言及されている人物が固有名詞で呼ばれる頻度を男女別に調べた。グラフ4はその結果を表したものである。固有名詞で呼ばれる割合はどの年代の教科書においても男性の方が高くなっている。しかし、年代を経るにしたがって男性が固有名詞で呼ばれる割合は減少し（『PRACTICAL JAPANESE CONVERSATION』の51.6%から『日本語の基礎』の97.5%への増加は除く）、女性が固有名詞で呼ばれる割合が増加してきて、男女の差が小さくなってきている。1967年の教科書『PRACTICAL JAPANESE CONVERSATION』では51.6ポイントの差があったのが、1998年の教科書『みんなの日本語』では19.2ポイントにまで下がってきている。

グラフ4：言及されるとき呼ばれる方-(1)固有名詞(単位は%)

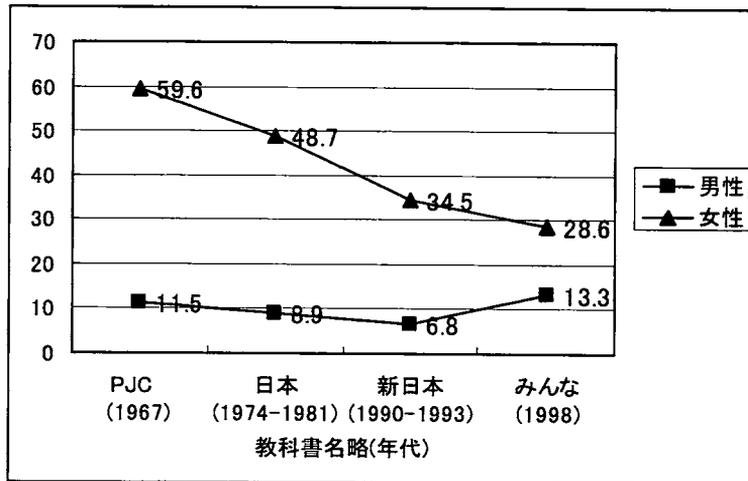


### 2.2.2. 親族名称

親族名称とは家族の役割を表す呼び方のことで、例えば、「おねえちゃん」や「お父さん」、「お母さん」などがこれにあたる。グラフ5は文中で言及されるときに親族名称で言及されている頻度を男女別に表したものである。それを見ると親族名称で呼ばれる割合は固有名詞のときとは男女の比率が逆

転し、どの年代の教科書においても、女性の方が多くなっている。しかし、これも年代を経るにしたがって変化が見られる。女性が親族名詞で呼ばれる割合は次第に減少し 1967 年には 59.6%であったのが 1998 年には 28.6%とほぼ半減している。男性の方はほとんど変化はないが、1967 年の 11.5%から 1998 年の 13.3%へ多少増加している。男女の差は 1967 年には 48.1 ポイントあったのが、1998 年には 15.3 ポイントに減少している。

グラフ 5：言及されるとき呼ばれる方(2)-親族名称(単位は%)



### 2.3. 形容のされ方

形容のされ方は実際にどのようなものがあるか、想像しやすいように以下に形容のされ方がわかる例文を挙げておく<sup>7)</sup>。

H：木村さんはきれいです。

この文では「木村さん」という女性に対して「きれい」という形容がされている。

以下は形容のされ方についての調査結果である。

形容のされ方は特に外見に言及する形容とそれ以外の形容に分けて調べた。グラフ 6、グラフ 7 はそれぞれ形容のされ方を外見とそれ以外のものに分けてグラフに表したものである。形容されているのは外見に関するもの、

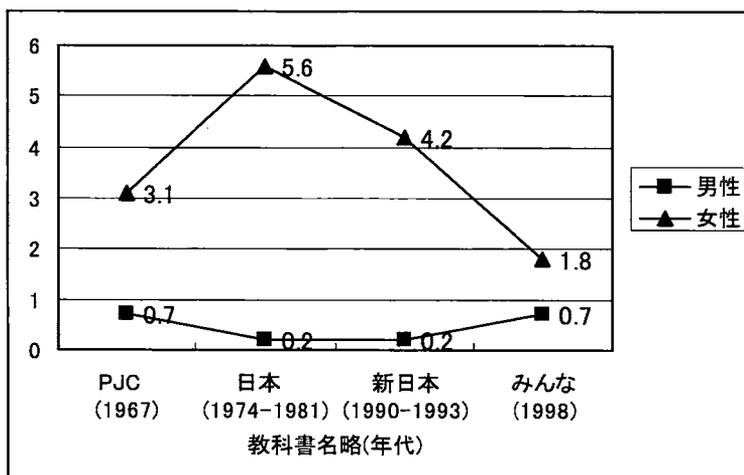
<sup>7)</sup> 『新日本語の基礎 I』 p.64

外見にかかわらないものともに、女性の方が多い。年代を経るにつれ、全体としては形容のされ方の男女の差は小さくなっていく傾向があった。『PRACTICAL JAPANESE CONVERSATION』(1967)を除いてグラフを見てもその傾向がよりはっきりと分かる。

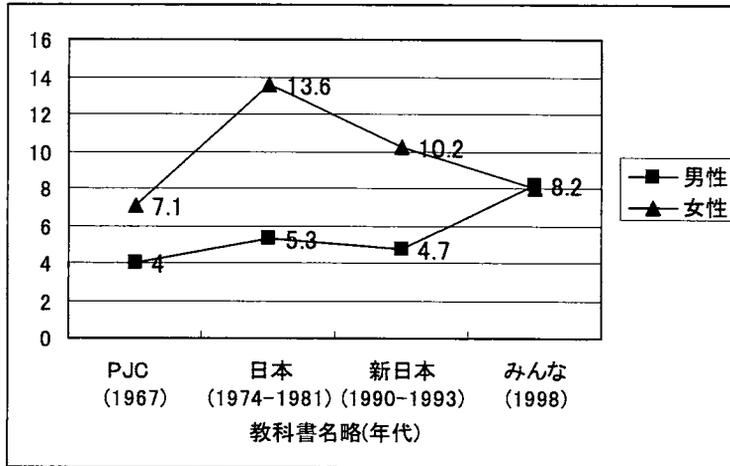
外見に言及するものには例えば、「きれい」、「ハンサム」、「髪が長い」、「背が高い」などがあつた。

外見以外に言及する形容として主に女性より男性に多く使われていたのは、「忙しい」、「暇だ」、「まじめだ」などである。一方、男性よりも女性に多く使われていたものには「〇〇上手」、「頭がいい」、「親切だ」、「素敵だ」や結婚に言及するものなどがあつた。

グラフ 6 : 形容のされ方(外見に関するもの) (単位は%)



グラフ 7：形容のされ方(外見に関するもの以外のもの) (単位は%)



### 3. 考察

登場の頻度では男性と女性で差が見られた。どの年代の教科書においても文の話者、言及される人物、言及される人物のうち主語である人物ともに、女性よりも男性の方が多く登場していた(グラフ 1~3)。人口構成上、男女はほぼ同じくらいの比率で存在しているので、教科書中にも男女が同比率で出てきてもよさそうなものである。ところが、そうではなかった。これは、社会に進出している男女の差を反映しているのかもしれない。このように差が認められるのは一種の「差別」であるといってもよい。ここで差別と言っているのは、男女の登場比率に大きな差があることによって、例えば社会の中ではあまり女性が活躍していないような印象を学習者に与える可能性があるからである。年代を経るにつれて、改善されることが期待されたが、今回対象とした教科書では登場頻度の男女差は年代を経ても小さくなることはなかった。これは、言及されるときに呼ばれ方や形容のされ方などの教科書使用者の目につきやすい内容部分での男女平等化に力が注がれ、登場頻度はあまり重要視されなかった結果ではないかと考えられる。

また、言及されるときに呼称では男性は固有名詞で、女性は親族名称で呼ばれる傾向があることが分かった(グラフ 4・5)。対象を固有名詞で呼ぶことはその対象を個人とみなし、親族名称で呼ぶことはその対象をある特定の制度内での役割を持ったものとみなしていると考えられる。そのため、今回対

象とした教科書においては、男性は個人とみなされているのに対し、女性は母や妻など何らかの役割を持った人物とみなされている傾向があるといえる。しかし、その傾向は年代を経るにしたがって小さくなっている。男性を個人とみなし、女性には何らかの家族の役割を持たせる社会から、男女ともに個人として尊重されるようになった社会をこのような形で反映していると考えられる。

さらに、男女の形容のされ方についてであるが、外見に関する形容がされている頻度は男女を比べると女性の方が多(グラフ 6・7)。これは男性よりも女性のほうが外見を重要視されるということを表していると考えられる。年代を経るにつれ全体として外見に関する形容をされる男女の頻度の差が小さくなっているのは、男女平等への配慮がされているためではないかと思われる。しかし、外見以外の形容に関しても、同じように男女の差が小さくなっているため、必ずしも外見に言及することに関しての男女平等な配慮とはいえないかもしれない。

#### 4. 結論

登場頻度、言及のされるときの呼ばれ方、形容のされ方のそれぞれにおいてどの年代の教科書でも男女で差が見られた。

登場頻度を見た場合、男性は女性よりも多く登場していた。文中の話者、文中で言及されている人物、言及されている人物の中でとくに主語となっている人物ともに、新しい教科書においても男女の差が変わらずに認められた。

一方、言及されるとき呼ばれ方では固有名詞は男性に、親族名称は女性に多い傾向があった。しかし、ともに年代を経るにしたがって男女の差が小さくなっていることが明らかになった。

また、形容のされ方についても、女性は男性と比べて外見を表現するものと結び付けられやすい傾向があったが、その差は新しい教科書においては小さくなっている。

これらにより、教科書の中の男女差別は、言及されるとき呼称や形容のされ方の視点から見れば減少傾向にあるといえるが、登場頻度という視点から見ると変わらず存在しているといわざるをえない。

しかし、そのような意識の元で作られた、男女差別の表現の少ない教科書の使用が、人々の意識や価値観にどれくらいの影響を与えているのかについては、不明であるし、それを明らかにすることは困難である。人々は周囲のさまざまなものから影響を受けている。そのため、例えば、男性も女性も家

事をするべきという考えを持っている人がいたとしても、その考えが何から影響をうけて生み出されたものなのかということ特定することは非常に困難なのである。

今回の分析の視点から見た平等な教科書にするための案をまとめると次のようなものになる。まず、登場頻度は男性が多くなっているので、男女の比は 1:1 になるようにすることが望ましい。言及されるときに呼称に関しても固有名詞と親族名称ともに男女の差が小さくなりつつあるが、まだ差はみられる。男女ともに同程度で固有名詞、および親族名称で呼ばれるようにすることが望ましい。

最後に今後の課題を以下にまとめておく。

本稿では教科書の中の男女差別を検討するにあたって、(1)登場の頻度、(2)言及されるときに呼ばれ方、(3)形容のされ方の 3 つの視点から例文を分析に留まった。しかし、これらの 3 つの視点以外にも男女の差が現れるであろう項目が考えられる。例えば、意味レベルでの行為者、受益者には男女で差が生れていることが予想される。具体的には、多くの場合、男性が行為者で、女性が受益者となっていることが予想される。

また、日本語を母語としない人のための日本語教科書は、日本人が小学校、中学校、高等学校で一般に使用する教科書に比べて、男女差別がないように配慮されている可能性がある。それは、日本語を母語としない人のための日本語教科書が対象とするのは、日本人だけではないからだ。多様な価値観を持ったさまざまな人々を対象として想定しているために、男女のあり方に関しての記述にも配慮がされている可能性があると考えられる。

今後の課題は、上記の 2 点である。まず、1 点目は日本語教科書の中で行為者と受益者の性別はどのようになっているのかということ明らかにすることである。もう 1 点は外国人日本語学習者向けの日本語教科書と日本人学習者向けの国語教科書の中の男女差別について比較検討することである。

## 文献

- －東照二(1997): 『社会言語学入門』 研究社.
- －伊藤良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子(1991): 『教科書の中の男女差別』 明石書店.
- －ことばと女を考える会(1985): 『国語辞典にみる女性差別』 三一書房.
- －Lakoff, R. (1975): *Language and Woman's Place*, New York: Harper & Row [レイコフ著 かつえ・あきば・れいのるず / 川瀬裕子訳(1985) 『言語と性』 有信堂].

- Spender, D. (1985): *Man Made Language*, London: Routledge & Kegan Paul [D. スペンダー著 れいのるず=秋葉かつえ訳(1987)『ことばは男が支配する: 言語と性差』勁草書房].
- 田中和子・諸橋泰樹編(1996)『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』現代書館.